



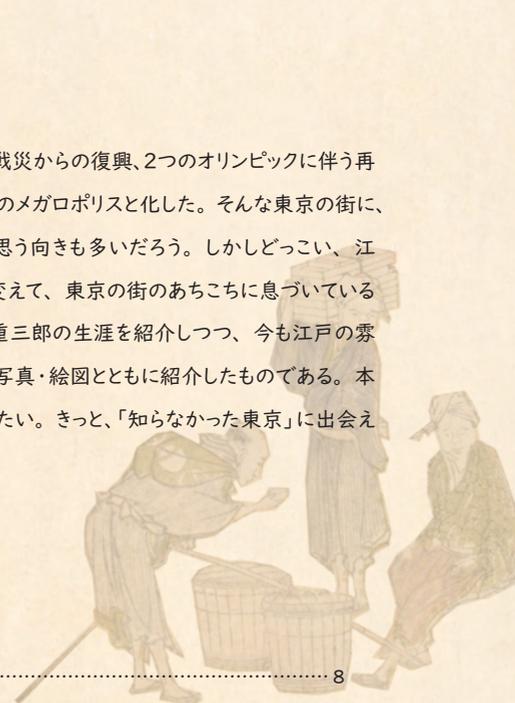
はじめに

江戸が東京と名前を変えてまもなく160年。震災・戦災からの復興、2つのオリンピックに伴う再開発などを経て、東京は今や人口約1000万(23区)のメガロポリスと化した。そんな東京の街に、どれほどの江戸の形跡が残されているのか、疑問に思う向きも多いだろう。しかしどっこい、江戸の名残は今もひっそりと、あるいは近現代風に姿を変えて、東京の街のあちこちに息づいているのである。本書は江戸庶民文化の立役者だった蔦屋重三郎の生涯を紹介しつつ、今も江戸の雰囲気が味わえるスポットを、30のエリアに分け、地図・写真・絵図とともに紹介したものである。本書を手には是非、江戸スポット巡りに乗り出していただきたい。きっと、「知らなかった東京」に出会えるはずである。

全体図	4
中心部図	6

蔦屋重三郎の生涯

1 生まれた時代	8
2 吉原で本屋業を始める	11
3 「吉原細見」を扱う	13
4 『一目千本』で版元に	14
5 豪華絵本・富本節関連本・往来物を手掛ける	15
6 黄表紙の出版を開始	16
7 日本橋に進出する	18
8 「天明狂歌ブーム」に乗る	19
9 「寛政の改革」の影響	20
10 狂歌絵本を出版	21
11 筆禍	23
12 武者絵本と心学もの	24
13 美人画を出版	25
14 書物問屋となる	27
15 写楽を売り出す	28
16 江戸の観光案内書を出版	29
17 その後の蔦屋と江戸の出版界	31
18 蔦屋重三郎をめぐる人々	32



コラム

五街道と江戸四宿	43	江戸の六地藏	71
大名屋敷	50	隅田川と五橋	79
江戸三大祭	51	江戸七富士	88
江戸時の鐘	59	江戸の五色不動	89
		芝居になった江戸の事件・伝承	101

エリアガイド

皇居周辺	38	待乳山	76
日本橋	40	入谷	80
赤坂・霞が関	44	南千住・三ノ輪	82
芝・浜松町	46	両国	84
築地・佃島	48	深川	86
高輪・品川	52	向島	90
湯島・お茶の水	54	西大島	94
上野	56	木場	95
本郷・後楽園	60	池袋	96
白山・本駒込	62	早稲田	98
駒込・巢鴨	64	四谷	100
日暮里	66	新宿	102
王子	68	原宿	104
浅草	72	表参道	105
亀戸・錦糸町	74	目黒	106

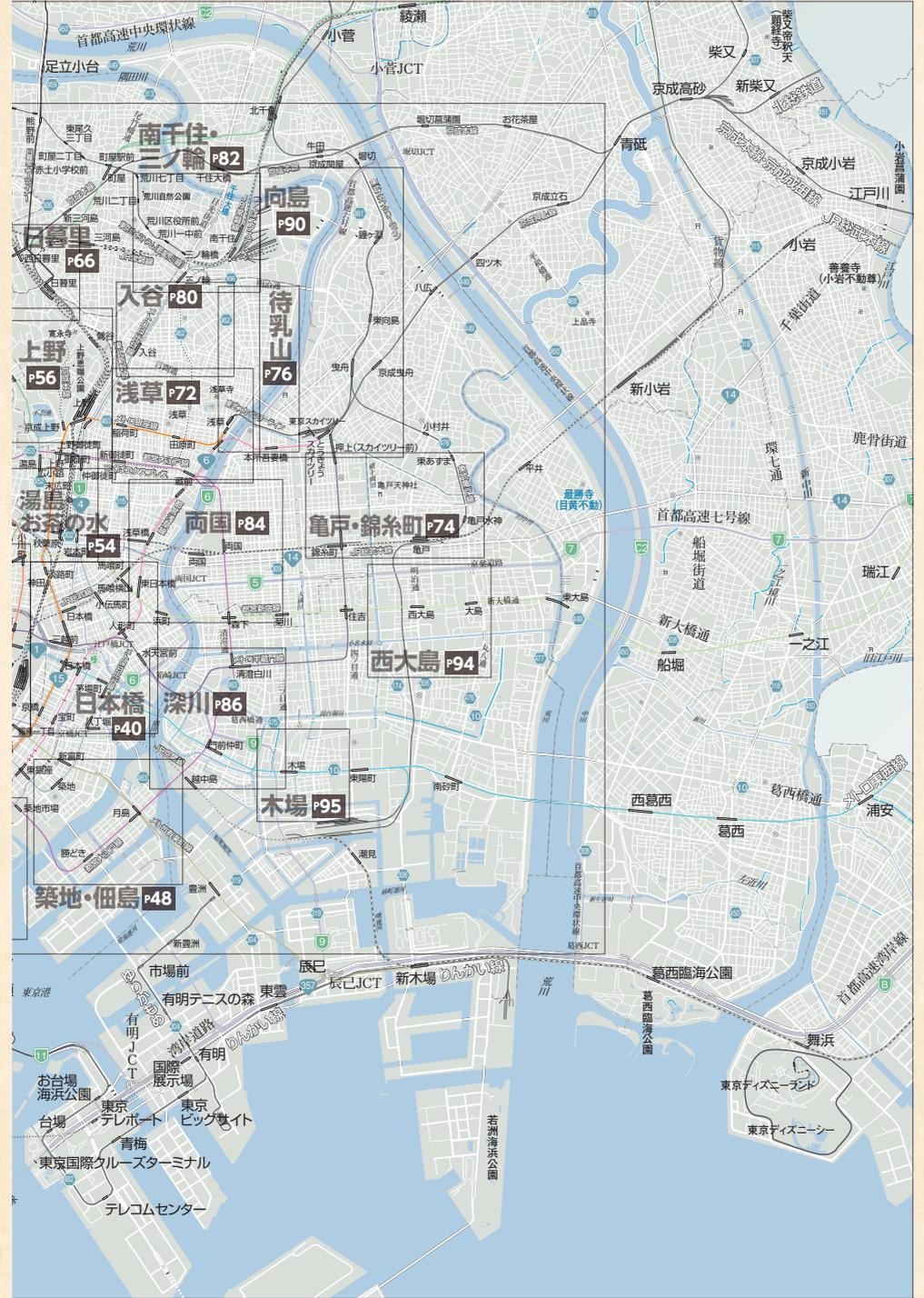
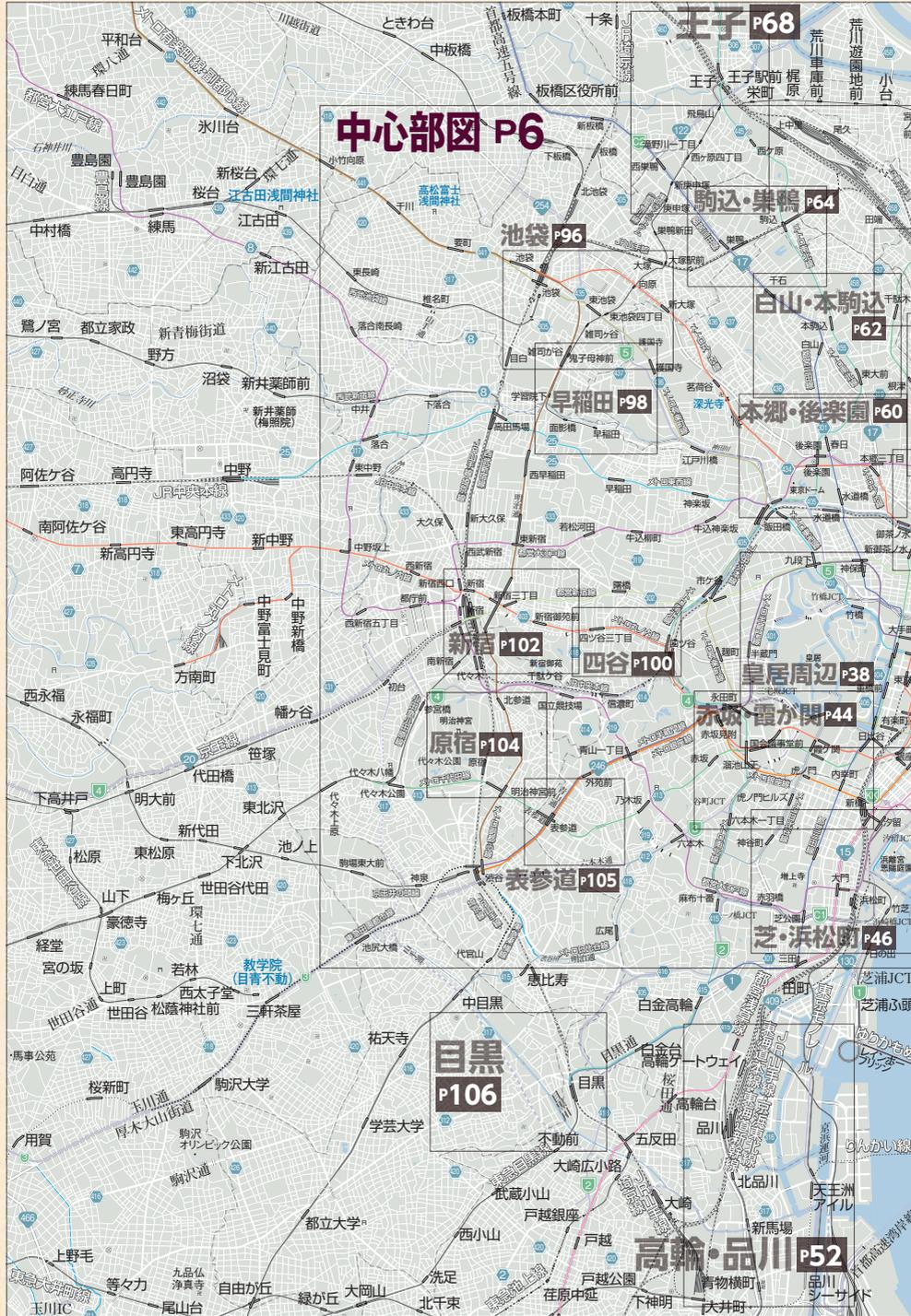
黄表紙傑作選	108
大江戸年表	112
蔦屋重三郎年表	114

索引	116
主な参考文献・使用絵図	118
あとがき	119
著者プロフィール・奥付	120

*本書で取り上げた箇所の中には、十分な観光対応が行われていない所もあり、団体利用等に当たっては御留意ください。



全体地図



蔦屋重三郎の生涯

「まじめなる口上」を述べる蔦屋重三郎（箱入娘面屋人魚）



太平の世が定着し、庶民文化が胎動し始めた18世紀半ばの江戸。そこへ、サブカルチャーの旗手として忽然と現れたのが、稀代の出版人・蔦屋重三郎だった。豊かな人的ネットワークを駆使し、新たな才能を見出せば、黄表紙、洒落本、狂歌、浮世絵など、「粋」「通」「穿ち」を重んじる分野でベストセラーを連発した。彼がいなければ、江戸っ子の暮らしはよほど味気ないものになっていたろう。名プランナーであり、名プロデューサーでもあった「蔦重」——その生涯とはいかなるものであったのか。彼が世に出した出版物を通して、足跡を辿ってみたい。

1 生まれた時代

蔦屋重三郎は、寛延3年（1750）正月7日、江戸の吉原（新吉原）で生まれた。父は尾張国の出身で、吉原遊郭に勤める丸山重助、母は広瀬氏出身の津与といった。7歳の頃、両親が離別し、吉原の引手茶屋、喜多川氏の養子となる。この喜多川氏の屋号が蔦屋だったようだ。なお、引手茶屋とは、遊郭における斡旋業のようなもので、客を遊女のいる妓楼（遊女屋）へ案内するほか、武家や町人らの社交の場でもあった。

さて、重三郎の生まれた頃、日本はどんな時代であったのか、まずはそこから見ていこう。

●江戸時代の折り返し点

徳川家康が江戸幕府を開いたのは、関ヶ

原の戦いから3年後の慶長8年（1603）。以降、慶応4年（明治元年／1868）の明治維新まで、徳川の世が260年余り続く。したがって重三郎が生まれたのは、江戸時代が折り返し地点を少し過ぎた頃のことであった。

当初は幕府の統治を安定させた幕藩体制も、18世紀に入るとほころびが目立つようになる。幕府・藩の財政悪化が進み、下級武士は窮乏して、傘張りや楊枝づくり、朝顔栽培などの内職に勤しむ者も多かった。そこで、幕府は改革に乗り出す。重三郎が生まれる少し前、8代将軍・徳川吉宗が武士に質素儉約、綱紀肅正を命じるとともに、大名に対しては、上米（石高1万石について100石の米を上納させ、代わりに参勤交代で江戸に在住する期間を半年に短縮する制度）などの財政再建策を打ち出した。いわゆる享保の改革（1716～1745）であるが、一定の効果は上げたものの、



江戸城跡（皇居／地図39頁）

年貢を増額したことなどから、農民の反発を招いて失速する。

吉宗に続いて改革に取り組んだのは、安永元年（1772）、10代将軍・徳川家治の老中となった田沼意次であった。意次は、農業政策から商業振興策に舵を切り、貨幣経済を発展させた。江戸の町は豊かになり、人々が歌舞伎や浮世絵などの娯楽を楽しむ風潮を生む（そのタイミングで重三郎は頭角を現すのである）。しかし、一方で賄賂が横行し、浅間山の大噴火や天明の飢饉などの天災にも見舞われ、農民らによる一揆（百姓一揆）や打ちこわしが各地で発生して、天明6年（1786）、意次は失脚した。

この後、11代将軍・徳川家齊の老中・松平定信が、寛政の改革に取り込むことになるが、それについては後述することとしよう。

●化政文化の先駆け

江戸時代は、目覚ましく文化が発展した時代でもあった。何せ100年以上も続いた戦国時代が終わり、太平の世を迎えて、人々の心

が芸術・学問分野になびくのは当然のことであつたらう。17世紀後半から18世紀初めにかけて、まずは上方（大坂・京都）を中心に文化の華が開く。いわゆる「元禄文化」だ。その特徴は、豪商や武士を担い手とし、華麗で人間味を重視するところにあった。絵画では琳派を創始した尾形光琳、文学では井原西鶴、近松門左衛門などが代表的人物として挙げられる。

18世紀後半以降、貨幣経済の浸透とともに、江戸の町は著しい発展を見せ、文化の中心は上方から江戸へと移ってくる。文化・文政時代にピークを迎えるその文化は、「化政文化」と呼ばれ、元禄文化と異なって派手な要素は少なく、庶民も参加できるような性格を特徴とした。絵画では葛飾北斎や歌川広重、文学では曲亭（滝沢）馬琴、十返舎一九、小林一茶などが代表的人物であった。重三郎は、化政文化の先鞭をつけるように現れた出版人であり、その時代の文化を短く区切って、「天明文化」と呼ぶこともある。

15 写楽を売り出す

寛政5年(1793)、松平定信の行った寛政の改革は、人々の反感を買って行き詰まり、同年7月、定信は老中の座を追われた。定信の奢侈禁令で不況に陥っていた歌舞伎業界は、定信の退陣により明るい兆しが見え始める。江戸の庶民にとって、歌舞伎は人形浄瑠璃と並んで、娯楽の代表だった。いきおい、歌舞伎ファンの期待も膨らんできたが、その動きを元々芝居好きの重三郎は見逃さなかった。そこで登場させたのが、東洲斎写楽である。

写楽による歌舞伎役者の大首絵は、寛政6年(1794)5月、28点が一齐に発売され、以後翌年の正月までの発売点数は100余点上った。そしてそのすべてが、蔦屋から出されている。脇役・大谷鬼次や女形・佐野川市

松らの、演技中の表情やポーズを大胆に迫真性をもって描いており、写楽の役者絵は、肖像画として現在高く評価されている。しかし、発売当時の評判は必ずしも芳しくはなく、描かれる役者やそのファンから、クレームが付いたといわれる。写楽の絵が持つリアリティーが、かえって役者の見栄えを悪くしている、という理由からのようだった。

すい星のごとく現れた写楽だったが、デビューから10カ月後、やはりすい星のように浮世絵の世界から姿を消した(それが、昭和に入って「写楽別人説」を生む要因となる)。そして、写楽が去った後、重三郎に残された人生の時間は限られたものであった。



写楽の役者絵(右:市川緞蔵の竹村定之進、左:四代目岩井半四郎の乳人重の井)

歌舞伎の殿堂「江戸三座」

江戸時代、歌舞伎は人形浄瑠璃とともに庶民の娯楽の代表格であった。慶長年間(1596~1615)に、出雲阿国が男装して寺社の境内などで踊りを披露したことに始まった歌舞伎は、その後遊女や若衆(美少年)が演じ、人気を博すようになった。江戸でもあちこちに芝居小屋ができたが、「遊女歌舞伎」「若衆歌舞伎」は風紀を乱すということで禁止され、代わって若衆以外の男性による「野郎歌舞伎」が起る。これが、現在の歌舞伎の起源となった。中村座、市村座、森田座の3つ(今の日本橋人形町、銀座付近にあった)が、常設小屋での上演を許され、「江戸三座」と呼ばれた。日に千両の金が落ちるといわれるほどの賑わいを見せたが、天保12年(1841)火災に遭い、また、天保の改革(老中・水野忠邦が行った政治改革)に伴う倭約令の影響を受け、翌天保13年、江戸三座は、江戸の中心から離れた浅草の猿若町(現在の浅草6丁目付近)へ移った。

16 江戸の観光案内書を出版

太平の世が続き、気持ちにも余裕ができると、江戸の人々の娯楽への欲求は、アウトドアにも向き始める。季節とともに変化する自然との触れあいや、暦ごとの恒例行事への参加は、庶民にとって大きな楽しみとなった。花見

をはじめ潮干狩り、舟遊び、花火、月見、虫開き、紅葉狩り、雪見、酉の市、年の市などなど。江戸以外からも観光に訪れる人は増えてきたであろう。そこで、必要になるのが「江戸の観光ガイドブック」である。



「絵本名所江戸桜」

皇居周辺

江戸城跡(現・皇居)を中心とするエリアで、曲輪跡を整備した皇居東御苑や北の丸公園があるほか、桜田門や巽櫓など数々の江戸城の遺構が見られる。



江戸城天守台跡

の跡や江戸城本丸御殿最大の検問所であった百人番所、江戸城の正門ともいべき大手門など、徳川幕府の栄華を伝える史跡が見られる。

☎03-3213-2050 千代田区千代田1-1
 アクセス:各線 大手町駅(C13a出口)より徒歩5分(大手門)
 時間:9時~18時(季節により異なる)※入園は30分前まで
 休み:月曜(祝日場合翌平日)・金曜・年末年始・他休
 料金:無料

江戸城の本丸ほかを整備 皇居東御苑

皇居造営の一環として、江戸城の本丸・二の丸・三の丸の一部を整備し、昭和43年(1968)から皇居附属庭園として一般公開されている。面積約21万㎡の庭園には、季節ごとに鮮やかな草花が咲き、また、天守台



桜田御門外(東京都名所泥絵)

江戸城北の丸を整備 北の丸公園

江戸城の北の丸部分を整備し、昭和44年(1969)に一般開放された森林公園。江戸時代、北の丸には御三卿の田安家(千鳥ヶ淵側)と清水家(清水濠側)の屋敷があった。面積約19万3000㎡の園内には日本武道館、科学技術館、国立近代美術館、国立公文書館などの施設もあり、緑が豊かで、多くの人が散策を楽しむエリアになっている。



提供:環境省皇居外苑管理事務所北の丸分室

小田原街道の起点となった 桜田門

江戸城の内堀に造られた門の1つ。外側の高麗門と内側の渡櫓門の二重構造で、外柵形の形状が残る。小田原街道の始点に当たっており、小田原口とも呼ばれた。関東大震災で破損し、鉄網土蔵造に改修された。安政7年(1860)3月3日、当門外において大老・井伊直弼が水戸浪士らに暗殺される事件(桜田門外の変)が起こっている。



「石落とし」のある 巽櫓

江戸城の内堀沿いに造られた櫓の1つで、本丸から見て東南(辰巳)の方向にあることから、巽櫓と名付けられた。二重櫓としては全国最大規模で、桜田二重櫓とも呼ばれる。中央に出窓状にせり出した部分の下面には、「石落とし」という穴が開いており、登ろうとする敵兵に石や熱湯を浴びせて、撃退させるために造られたといわれる。



日本橋

江戸時代には越後屋などの大店が軒を並べ、江戸随一の賑わいを見せたエリアで、貨幣博物館や葛屋重三郎ゆかりの耕書堂跡のほか、伝馬町牢屋敷跡などがある。

五街道の起点 日本橋

日本橋川に架かる橋で、慶長8年(1603)、徳川家康が新たに江戸の町割を行った際に架けられたのが最初とされる。この橋を起点に五街道が整備された。日本国中の人が集まって架けたことから、日本橋と名付けられたとの説も。江戸時代には人通りが多く、木造のため火災が繰り返し発生した。現在の石造橋は19代目で、明治44年(1911)の築造。



写真提供:一般社団法人中央区観光協会



日本橋(「画本東都遊」)



久留米藩上屋敷に勧請 水天宮

文政元年(1818)、9代久留米藩主・有馬頼徳が江戸三田の久留米藩上屋敷に久留米水天宮の分霊を勧請したのが始まりとされる。明治5年(1872)に現在地に移転。安産、子授けの神とされ、境内には、「子宝いぬ」「安産子育て河童」などお産に纏わるユニークなマスコット像があり、人気を呼んでいる。毎月5日に縁日が開かれ、5月5日には例大祭が催される。



子宝いぬ

☎03-3666-7195 中央区日本橋蛸船町2-4-1
アクセス:半蔵門線 水天宮前駅(5出口)より徒歩1分
時間:8時~18時(神札所受付) 休み:無休
料金:境内自由

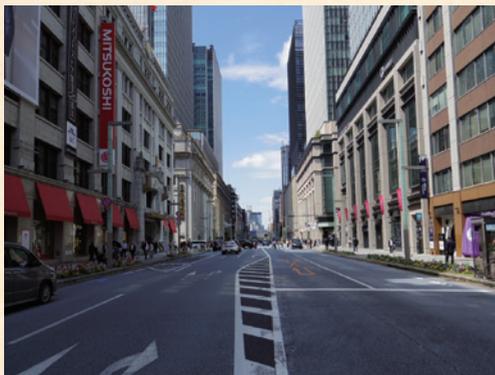


提供:日本銀行貨幣博物館

江戸時代の大判・小判も展示 日本銀行貨幣博物館

日本銀行金融研究所の2階フロアに設けられた貨幣に関する博物館で、日本銀行創立100周年(1982)を記念して、昭和60年(1985)に開館した。と同開珎、大判・小判といった古い日本の貨幣のほか、世界の貨幣・紙幣、軍票、記念硬貨、スタンプなど約3000点が展示されている。また、千両箱の重さなどを体験できるコーナーもある。

☎03-3277-3037
中央区日本橋本石町1-3-1(日本銀行分館内)
アクセス:半蔵門線 三越前駅(B1出口)より徒歩1分
時間:9時半~16時半
休み:月曜(祝日場合翌平日)・年末年始・他休
料金:無料



**越後屋が出店した
駿河町跡(日本橋室町)**

江戸時代、現在の日本橋1丁目から2丁目にかけての西側を駿河町と言った。町の名は、富士山が眺められる景勝地だったからとも。天和3年(1683)、伊勢国松坂出身の三井高利(八郎右衛門)が、この地に越後屋呉服



蔦屋重三郎の書店 耕書堂跡

耕書堂とは、江戸時代中期の版元(出版業者)・蔦屋重三郎が開いた店舗。重三郎は新吉原の生まれで、最初新吉原の大門前で本屋を開いたが、徐々に事業を拡大し、天明3年(1783)9月に出版のメッカであった当地(日本橋通油町)に進出して、有力な地本問屋となった。葛飾北斎の「画本東都遊」に店先の光景が描かれている(18頁参照)。



店を出店する。「現金掛値なし」を売り文句に大繁盛し、やがて越後屋は、両替商にも乗り出して、それが後の三越、三井銀行(現・三井住友銀行)の誕生につながった。



吉田松陰終焉の地碑

**八百屋お七・平賀源内も投獄された
伝馬町牢屋敷跡(十思公園)**

江戸時代、囚人らを収容した全国最大規模の牢獄の跡。刑務所と拘置所を兼ねたような施設で、死刑の執行も行われた。慶長年間(1596~1615)から明治8年(1875)まで、270年余りにわたって存続し、八百屋お七、平賀源内、吉田松陰なども投獄されている(十思公園内には吉田松陰終焉の地碑が立つ)。隣接の小伝馬町牢屋敷展示館では、牢の構造などが詳しく解説されている。

五街道と江戸四宿

日本橋を起点とする五街道とは、東海道・甲州道中・中山道・日光道中・奥州道中の5つである。徳川家康が全国を支配するために整備を進めたといわれ、後には参勤交代で大名行列が通るルートにもなった。各街道には1里(約4km)ごとに一里塚が築かれ(エノキなどの高木が植えられた)、旅人たちの道標となった。

また、宿泊施設を提供する宿場が要所に配置され、飯盛女(私娼)がいる旅籠もあって賑わいを見せた。特に五街道の一番江戸に近い宿場を四宿(品川宿・板橋宿・千住宿・内藤新宿)といい、飯盛女を目当てに江戸の男子も足を運んだという。

■東海道と品川宿

東海道は、日本橋と京都・三条橋53次(約500km)を結ぶ主要道。五街道のうち参勤交代に最も多く利用され、所要時間は約2週間だった。江戸の出入り口にある品川宿は、四宿の中で飯盛女の数が最も多く、岡場所(非公認の遊郭)としても栄えた。



品川日之出(「東海道五十三次」)

■中山道と板橋宿

中山道は日本橋から前橋、下諏訪を経て、近江草津までの67次(約508km)。京都までは69次(約526km)。山岳地帯を通り、冬の寒さも厳しかったが、時に川止めがある東海道と違って所要時間に狂いが少なく、往来は盛んであった。江戸の出入り口にある板橋宿は、宿場内を流れる石神井川に架かる板橋がその名の由来といわれる。

■日光道中・奥州道中と千住宿

日光道中は、日本橋から千住、宇都宮を経て日光までの21次(約130km)で、日光東照宮への参拝に利用された。奥州道中は、日本橋から宇都宮を経て、陸奥・白河までの27次(約190km)。日本橋から宇都宮までは日光道中と重複する。千住宿は両道中の江戸の出入り口にあり、隅田川に架かる千住大橋を域内に含むことから、交通の要衝としても栄えた。



武州千住(「富嶽三十六景」)

■甲州道中と内藤新宿

甲州道中は、日本橋から内藤新宿、八王子、甲府を経て下諏訪で中山道と合流する43次(約220km)。江戸城陥落の際に将軍が甲府へ逃避するための道路として整備されたともいわれる。江戸の出入り口の宿場は、当初高井戸にあったが、江戸から遠いため、新たに日本橋との間にある内藤氏の土地に設けられ、内藤新宿と名付けられた。

はこいりむすめめんやにんぎょ
箱入娘面屋人魚～浦島太郎の後日談～

作:山東京伝 画:歌川豊国 版元:藝屋重三郎

隅田川を埋立てつくられた繁華街・中洲新地が、ある日突然竜宮の支配する所となる。そこに住む浦島太郎は、竜王令嬢の乙姫様を妻としていたが、近ごろは美人の乙姫様に飽きてしまい、料理茶屋の娘・お鯉のと浮気をする。やがて、2人の間に子どもができるが、その子は頭は人間、体は魚の人魚であった。竜王の手前、自分の手元では育てられないと、太郎は泣く泣くその子を品川沖の天王洲(地図53頁)に捨てたのだった。

それから十数年後、平次というさえない漁師が、品川沖へ漁に出たところ、髪を乱した女の化物が舟に飛び込んでくる。かつて、浦島太郎に捨てられた人魚だった。女ざかりとなった人魚は、「妻にしてください、抱いて寝て



ください」と平次を口説く。最初は気味悪がった平次も、人魚が妙に色っぽく顔も美人なので、妻にすることにした。

平次の妻となった人魚は、貧乏な夫を助けようと、いろいろ考えを巡らす。そこに目を付けた遊女屋の主人・伝三は、人魚と契約を結び、「魚人」という源氏名で遊女として売り出そうとする。手の無い人魚は黒子の助けを借りて、初めて客を取るが、客は人魚の生臭さに耐えかねて、逃げ出してしまふ。伝三の思惑は失敗に終わり、人魚は平次のもとに返されたのだった。

人魚の扱いに思案する平次に、近所の学者が「人魚をなめると寿命が延びるという言い伝えがある」とアドバイスする。早速平次は「人魚おなめ処」をオープン。なめ賃1人金1両1分という高額にもかかわらず、客が列を成す大繁盛となった。それを見た隣家の主人が、嫁に鯉のぼりを着せて、儲けようとする事態も。

平次は人魚のおかげで大金持ちになったが、暇さえあれば人魚をなめていたので、若返り過ぎて、おっぱいを欲しがらる子どもになってしまった。困った2人の前に現れたのが、人魚の両親である浦島太郎とお鯉の。両親が持参した玉手箱を開けると、平次は程よい若さに戻り、しかもなぜかイケメンになっている。一方、人魚のほうは、下半身の魚の部分が剥がれて、全身が人間となり、さらに人魚の抜殻が葉の材料として売れ大儲け。2人は堺町の辺りに家を建て、いつまでも幸せに暮らしたという。ちなみに、その辺りは人魚にちなんで「人魚町」と呼ばれたが、その後なまって「人形町」(地図40頁)になったのだとか。

だいはのせんろつぽん
大悲千禄本～千手観音の貸し手商売～

作:芝全交 画:北尾政演(山東京伝) 版元:藝屋重三郎

衆生を千本の手で救うという千手観音も、不景気には勝てず、千本の御手を損料貸しすることにあいなり、面の皮屋千兵衛という山師が、観音の御手を損料貸しする利権を買って、1本1両の「手切れ金」で観音の千手をすべて切り払ったのだった。

その話を聞いて、手の入用の者が続々と千兵衛のもとへ集まって来る。羅城門で渡辺綱に腕を切られた鬼神・茨木童子は、御手を借りてはみたものの、毛のない腕では格好がつかず、神田駿河台(地図54頁)の人形師・与吉に頼んで、鹿の毛を生やしてもらった。

平忠度は一ノ谷の戦いで、源氏の郎等に右腕を切り落とされたが、左腕で敵を投げ飛ばしたという記憶から、つい左腕を借りてしまい、短冊に歌を書くと左文字(裏返しに見た形の文字)になって、外聞が悪いので「詠み人知らず」にしてもらう。

手の無い(客あしらいのうまくない)遊女は、観音の御手の手練手管で客をだまし、ままと金を使わせるが、損料の取立て人が頻繁に来るので難儀する。

無筆な(読み書きができない)者は、観音の御手で自慢げに証文や手紙を書くが、仏の手なので梵字ばかりで通用しない。ケチな奴は、ただ返すのは損だと、観音の御手の爪に火をともし、蠟燭の代わりにする(これが手燭の始まりとか)。

伊勢鈴鹿山の鬼神退治の勅命を受けた征夷大將軍・坂上田村麻呂は、千の手が無ければ、「一度放せば千の矢先」という名場面(謡曲『田村』にある)ができないと、観音のところへ千手を借りにやってきた。御手は貸し



出されて1本も残っていなかったが、観音は千兵衛と掛け合い、貸し出した手を取り集めて、田村麻呂に貸してまた儲けようとする。

ところが、返ってきた手をあらためると、遊女に貸した手は(心中立てのため)小指が無くなり、握りこぶして返るのは喧嘩の手傷があり、塩屋に貸したのは塩辛く、紺屋に貸したのは青くなり、下女に貸したのは糠味噌臭い。鉛屋のはねばねばし、飯炊きのはしもやけだらけ、搦米屋のは豆だらけ。

ともあれ田村麻呂は、大願成就のうちは、1両8本の損料で千本の手を返すことを約束し、観音に派手に見送られながら、出陣したのであった。

執筆者プロフィール

鳥越一朗 (とりごえ・いちろう)

作家。京都府京都市生まれ。

京都府立嵯峨野高校を経て京都大学農学部卒業。

主に京都や歴史を題材にした小説、エッセイ、紀行などを手掛ける。

「紫式部と源氏物語 京都平安地図本」「徳川家康 75 年の運と決断」、

「陰謀の鎌倉幕府」、「オキナワの苦難を知る 伝えていこう! 平和」、

「明智光秀劇場百一場」、「1964 東京オリンピックを盛り上げた 101 人」、

「おもしろ文明開化百一話」、「天下取りに絡んだ戦国の女」、「電車告知人」、

「京都大正ロマン館」、「麗しの愛宕山鉄道鋼索線」、「平安京のメリークリスマス」

など著書多数。

写 真 鳥越一朗

写真協力 台東区 江東区 中央区観光協会 千代田区観光協会

江戸たいとう伝統工芸館 すみだ北斎美術館 太田記念美術館

環境省 (皇居外苑管理事務所・新宿御苑管理事務所)

国立科学博物館附属自然教育園 日本銀行金融研究所貨幣博物館

(公財) 東京観光財団 小石川植物園 印刷博物館 護国寺 水天宮

金刀比羅宮 赤坂氷川神社 芝大神宮 花園神社 高岩寺 教学院 圓乗寺

※各施設様には拝観等の情報をご提供いただきました。

あらためてご協力に感謝申し上げます。

TOKYO で「華のお江戸」を巡る

東京江戸地図本 蕨屋重三郎をはじめ喜多川歌麿、山東京伝など江戸の文化人も紹介

定価 定価 1320 円 (本体 1200 円 + 税 10%)

第 1 版第 1 刷

発行日 2025 年 1 月 1 日

文 鳥越一朗

編集 橋本豪 ユニプラン編集部

デザイン 岩崎宏

発行人 橋本良郎

発行所 / 株式会社ユニプラン

〒 601-8213 京都市南区久世中久世町 1 丁目 76 番地

TEL.075-934-0003 FAX.075-934-9990

振替口座 / 01030-3-23387

印刷所 / 株式会社プリントバック

ISBN978-4-89704-611-2 C2026